

北支で生まれた長女も六十歳にもなろうとしている。今思えば人生は浦島太郎のようだ。私は八十五歳にもなる。今は一人で何不自由なく暮らしている。時々孫達が来てくれるのが何よりの楽しみだ。今年の暮には横浜にいる末の子、明彦が来る事になっており、楽しみに待っている。

満州戦線

終戦時の「どさくさ」

福井県 矢部 皓

(旧姓 安田)

私の生まれ育った所は福井の山奥で、分水嶺から日本海に注ぐ暴れ荒河といわれた「九頭竜川」の上流です。日本列島も太平洋側は気候温暖で地味豊饒ですが、反面、裏日本は日本海に向かい、特に冬期は雨天が多く、シベリア嵐が真正面に来ます。こういう地方の山間僻地で育った人間は、いかに苦しく、また貧しくとも辛抱強く、忍耐して働いていました。

住んでいたところは、下宇坂村の宇坂大谷で、部落の戸数は五十軒です。すべて善人で人情味豊かな所で、農業、林業と養蚕等で生計を立てていました。

私の家族は、両親の元に八人兄弟姉妹の十人で、

私は次男として生まれました。生活程度は、まあ中位でした。学校も小学校の義務教育修了後高等科を二年就学して、さらに勉学を志し「旧制工業専門学校」を受験、合格通知を受けました。しかし両親の労苦を思い、弟妹の多い家族の中で、自分一人のために勉学費の支出は不可能と思つて進学を断念しました。そして福井の酒井織物会社へ就職しました。

当地方は生糸の生産地で「絹織物」会社が多くありましたが、時代の流れで人造絹糸の製品が多くなり、会社も人絹工場でした。若い男も女も働く場が少なく、私もこのままでは駄目だと思つて「大陸へ雄飛」を心に秘めて、満州鉄道株式会社（満鉄）の工員募集に応じました。福井の町で六十人程度の受験者で「五人合格」でした。晴れて南満州鉄道の社員として渡満するに当たり「支度金、二百円支給」で大変吃驚しました。こんな大金見た事無しです。

南満州は当時の中国大陸有数の重工業地帯で、ますます発展する地でした。自分は満州鉄道会社の社員ですが、二年間の研修が朝鮮の龍山であり、朝鮮鉄道（鮮鉄と言ふ）で一年間は必修科目の勉強でした。勉学の途中にて「法定伝染病、赤痢」に罹病し、吐血の上に肉体が衰弱したために、余儀無く内地に帰つて自宅療養を命ぜられました。一年後に復職しました。満鉄の自動車部門の同和自動車で研修錬磨せよとのことでした。その後一般業務で元気に働いていました。

昭和十七（一九四二）年七月、徴兵検査は、現地の満州奉天で受験指令があり、甲種合格を申し渡されました。

翌昭和十八年一月十日、現地入隊せよとの命令書が来しました。歩兵第九十連隊第一大隊第一歩兵砲小隊でした。所は興安北省「いるせ」です。荒漠たる原野の中に一つポツンと小さな建物があり、これが衛兵分哨でした。兵舎は半地下で冬期の暖房用のペーチカの煙突が見えるだけです。自分達

は教育隊でしたので非常に厳しい訓練を受けました。第一期の検閲修了までは、起床から夜の消灯まで、少しの休憩もなく鍛錬させられました。

自分は人絹工場に二年半勤務していた頃に青年学校に通学していたお蔭で「軍人勅諭」をはじめ各兵科教本等を充分に頭に入れていましたのですべて、他人より優位にでき、教官からも「良くやる」とお褒めの言葉を戴きました。

とにかく、六十年以前の古い昔のことです。忘れたことが多く、概略が頭の中にあるだけで、特別に思ったことは「軍隊は階級社会也」ということでした。一日でも早く上級位になることが肝要と思い日々精進しました。

第一期検閲修了後に、幹部候補生と下士官候補生の志望申し込みがありました。幹候は旧制中学校卒業同等以上の学歴者です。自分達高等科や青年学校卒業者は下士官候補でした。受験に合格して阿爾山基地部隊（昭和十四年五月、日本とソ連邦との間に紛争のあった「ノモンハン」の南東二〇

〇キロの地点）です。

昭和十八年十二月十九日、南満州関東州界を通過して翌日二十日、旅順の関東軍第一下士官候補者隊へ入隊（因にハルピンは第二下士官候補者隊です）しました。立派な赤煉瓦で壁の厚さが五〇センチもある二階建ての兵舎でした。諸設備が国境方面の部隊兵営とは雲泥の差がありました。各歩兵科連隊から優秀な軍人が選抜された試験合格者揃いです。負けじ魂で一生懸命頑張りました。

兵要措置で自分は歩兵科ですが、他兵科・即ち「歩騎砲工輜重から通信・制毒・給水・衛生・等々」も微に入り細にわたり勉学を受け、また少しの間でも教義無い時には銃剣術で汗を流させられました。

昭和十九年七月五日、関東軍第一下士官候補者隊、全課程を優秀な成績にて修了し、阿爾山境界通過、原隊に復帰しました。

即ち七月十九日より、師団下士官集合教育のため

めに満州第十八部隊へ編入され、三カ月間の全兵科の新任下士官教育がありました。関東軍の基幹となり、その精神力と体力にて全軍の鑑となれということでした。

同年十二月、原隊より二十人の兵を引率し、国境前線基地の蘇丘警備隊長を拝命しました。即、任地に赴きました。国境線は一〇キロ位の所です。双眼鏡では明瞭にソ連領が見え、兵士の行動が手に取るがごとく判ります。この冬は特に寒かった。入浴は無し、髪や髭は延び放題、洗濯は禪、肌着（じばん）袴下（股引）を適当に行いました。

寒さは零下三〇度から四〇度にもなるが、空気が非常に乾燥しているので洗濯物はすぐ乾いた。春になって平原が緑になったと思ったら、僅か十日程で一メートル位に伸びる。

そうした時だった。騎馬部隊の一個中隊が来ました。中隊長の説明によると「近くの村、約二百軒が馬賊の巢窟だ」と言っていました。討伐実施。村長に説明するにはいかなる方法を取るのか、

「見学せよ」とのことでした。

一種の熱病が発生した「ペスト菌」である。近隣へ伝染する恐れあり。野鼠による伝染であるために「全村民の避難を命じる」ということで家の周囲に高粱を積み重ねて、放火して全家屋を焼き払った。そして悠々と引き返して行った。自分の守備隊は全員これをただ茫然と眺めていました。

数日後に荒井大尉が「事件現認視察」と言って一個分隊の警備兵を従えて来られました。高台から双眼鏡でちよつと眺めて「よく焼けてる、よし」と言って引き返されました。自分は土産にと思つて「魚を用意します」と言つてハルハ河（松花江の上流）の淵に手榴弾を一発投げ込んで、流れる魚を兵隊たちに採らせました。興安まぐろ・鯉・鮎・鯰等々がブクブクと腹を上にして流れ来る、大隊長は大満悦でした。

数日後に原隊復帰命令を受領しました。そして前線での垢を落として「のんびり」していました。

昭和二十年七月二十四日、荒井大尉より直命にて「遼陽に転属せよ」でした。遼陽満州第三七二二二部隊（新設部隊）で選抜で優秀な兵隊五人を連行せよでした。当時兵器は南方戦線に全部持ち出されていたため不足していました。兵隊も三八式歩兵銃や新式の九九式単小銃は二人で一銃という状態でした。自分と同行の兵には全員三八銃と弾薬各二百発及び手榴弾各二発を携行させて、原隊を後に遼陽を目指して鉄路を南下しました。現地では小学校を一校接收してあり、新任部隊長重松中佐に着任挨拶の申告を行いました。

重松部隊長は開口一番「各大隊長はじめ中隊長、それぞれの付属将校は数多くいるが、貴君が一番頼れる男と信ずる。よろしく頼む」と言われました。自分も南満州方面のことは一切不明だったが、部隊長にこのような言葉を頂戴したことは喜びて余りあるものでした。

ところが隊本部は部隊長がいる所で判明するが、第一、第二、第三各大隊がどこにいるか、各中隊

はどのようになっているか、将校服を着用の人間はかかなりいるが物の要には立たぬと、部隊は周章狼狽してました。

新設に伴う兵員は陸続として到着しますが、編成表も無くては致し方無しでした。このことを部隊長に進言すると、言下に「貴官に一任す」でした。自分のような下士官に全権を任かす部隊長もどうかということか、他の将校連中は「物の要に及ばずか」でした。

偶然、朝鮮龍山の朝鮮鉄道にいた時の朝鮮の男性と遭遇しました。一切情報なし、現段階では、彼を使つて状況を把握したいと思つて、幾許かの金子を渡し「釜山へ行って来てくれ」と依頼しました。というのは、時は昭和二十年八月です。部隊内外の雰囲気一種異様でした。内では部隊長以下全将校は物情騒然、外では付和雷同という有様でした。

朝鮮の男性からの報告によると「釜山の港には

一隻の軍船、御用船も無く、憲兵隊が目光らせていた」でした。後日判明したことです。大本営は五月末に満州の北部及び西部を放棄したとのことでした。

同年八月八日、部隊通信を使用して阿爾山基地の原隊へ電話を入れました。現在、西方ハルハ河から戦車を先頭にして砂塵を巻き上げ雲霞のごとく「ソ連軍」進撃中とのことです。即、自分は部隊長に現況を報告、指示を待ちました。呆然自失とはこのようなことを言うのか、ただ無言で「うむ」でした。

自分は八月十七日終戦を知らされました。また満鉄沿線には、それぞれ部隊が駐屯していました。がハルピン・新京（長春）・四平・奉天・遼陽とソ連部隊が鉄路を南下する姿を「じーつと眺め、見送っていた」ということで、関東州大連の関東軍本部も占領されました。聴くも語るも哀れでお粗末な限りでした。

国境最前線での反撃も火力の相違で対応出来得

ず、散華した戦友に哀悼の意を捧げるのみです。名門関東軍の末路の姿でした。また自分の部隊もいかに新設部隊でも部隊長以下各将校団は今日まで何を学び何を行って来たのか、自分のような下士官一人に責任を負わせて、呆然自失ただ眺めているだけで良いのですか。六十年経過した現在でも「腹立たしい」と思います。

古くは石原莞爾、板垣征四郎等の計画で「五族協和」満州・漢・蒙古・朝鮮・日本と理想の大東亜共栄圏の建設で満蒙開拓のため日本全国から移住した日本人は見捨てられました。軍人も究極の辛酸を、いやという程味わった。そうした上で彼の地に骨を埋めた人達を偲ぶ時、終戦時の「どさくさ」は永遠に語り伝えるべきだと、今日の今も感じています。

昭和二十二年三月三十日、朝まだきに「博多だ」の声を聴きました。静かに「辰春丸」は岸壁へ横

着けられました。果たしてここが日本だろうか？半信半疑でした。人間信義がいかに重大か痛切に感じたことでした。港の傍らで老人が「沢庵」を売っていました。「ここは日本ですか」と問うと「そうだ、博多だ」といわれた。やれやれ初めて安堵の胸を撫で降ろしました。郷里福井県下宇坂村へ帰ったのは四月十三日頃でした。

私が在満当時に、すでに兄貴が応召で妻と子供を残してビルマ戦線に出征し、名誉の戦死の広報が来ていました。兄の墓碑が建立され、仏壇には霊位がありました。私の事は風の便りで戦死したと知り、兄の石碑の隣に角塔婆を建てていました。当時全国で生きていた英霊と言って各戦線から復員して、家庭内で種々悲惨な事件が生まれました。我が家でも家族・親族会議で兄嫁と子供のことを考えて、弟の三男と兄嫁が再婚して、家督相続することと決定していました。私は自分の墓標を抜いてお寺に納めました。

数日後に警察官が日本人二世の通訳同行で米軍

将校（GHQ）を連れて来ました。田舎のことです。アメリカ人がジープで来たが大ニュースでした。ソビエトに抑留されていた軍人の第一号復員者ということで、赤い教育をどのようにされたか、現在の精神状態やいかに、ということでした。三時間程度の談話の後帰られました。が警察には要
注意人物で赤丸が付き、以来数年の間はよく見廻りに来ました。

私は冷静に考えました。当時、日本国中が大混乱していました。人間の一人や二人死ぬも生きるも我関せずでした。まして外地へ出征して部隊全滅だと言う噂が流れると老人はこれを信じたのです。

それ故に前述の「生きていた英霊」の言葉が流行了しました。私も同様、そのものずばりの状態でした。万一長兄が「ヒョッコリ」生還したら大変だったと思う。平和な現代人は想像できないと思います。戦争は戦場だけにあらず。そのために円満な家庭が悲惨の極に至った実状を多く見たり聴

いたりします。人の運命を根底から覆すことは戦争の掟です。

私も八十歳まで生き延びました。戦争の生証人として二度と戦争の無きを念じ、子孫にあの同じ苦しみを味あわせたく無いと思いながら、散華された沢山の英霊が泰らかに眠られるよう御祈念申し上げます。

関特演下番・

沖繩宮古島の軍務

神奈川県 下村 熊之助

私は東京東駒形に、両親の元に姉二人との五人の家庭に生まれました。出生時の産声が弱かったため、強くなれと「熊之助」と命名されたのとことです。親爺は苦勞人でよく働いたそうです。昔から言う江戸っ子気質で宵越しの金は持たねえ「チャキチャキ」の隅田川育ちの男でした。このため母親が経済的には苦勞したと思っていました。あの頃は日本国中経済不況で「暗黒の時代」でした。でも思い出には苦はなく楽しい事のみあります。亀戸天神の祭礼とか隅田川の花火など。一般庶民としては、政治とか軍部の跋扈、胎動とかには致し方ないことと想っていたのでしょうか。

小学校を卒業して高等科二年を修了しました。昭和十（一九三五）年四月より、東京貯金局に就